

# 語って伝える・歌やおどりで伝える



「イオル体験ツアー」の参加者に向かって語る川上英幸さん。体験談を、文字では伝わらない独特の語り口で語ってくれた。(上士幌町・東泉園：2)

伝統的なアイヌ文化では、物語などは、すべて口伝（口承）で伝えられました。

とくに、「サコロペ（英雄叙事詩）」や「オйна（神々の物語）」、「トウイタク（昔話）」と呼ばれる物語は、アイヌ民族の口伝による文化（口承文化）を代表するものです。何百年間も、家族の間で、あるいはコタン（集落）の中で、代々伝えられてきたのです。

内容はさまざまで、いろいろなカムイについての物語、英雄や戦いの伝説のほか、人間が生きていく上で大切な教訓や道徳を物語としたものなどがありました。

文字で伝えられることもたくさんありますが、語りじやなければ伝えられないこともたくさんあるのです。



ユクエピラチャシ跡（陸別町）（p117）。カネラン率いる十勝アイヌ軍と厚岸アイヌ軍が戦った時、厚岸軍がここに砦を築いたという伝説がある。（『改訂増補 アイヌ伝承と砦』より）

## 話し合いによる「戦い」

アイヌ民族にも武力による戦いがありましたが、一方で、話し合いによる「争い」も重要だったようです。チャシによっては、そこで「チャランケ（談判）」をしたという言い伝えもあります（チャシ p116）。

また、陸別のユクエピラチャシ（p117）には、「カネランは勇将で、気も強く、『弁舌も達者』であった。彼は『雄弁を悪用し』、他の人に無理難題をふっかけ、十勝や釧路のアイヌの人の宝物を取り上げていた。しかし、厚岸の100歳をこえた老女に『論破』された」という伝説があります。（『改訂増補 アイヌ伝承と砦』より、改変）

あまりいい例ではありませんが、アイヌ文化では「話す能力」が、とても大きな力を持っていたことがわかります。

## ことば遊びに歌やおどり

伝統的なアイヌ文化には、早口ことばや鳥の鳴き声にことばを当てる「聞きなし」などのことば遊び、日常や祈りの時などに使われる唱えごとなどがあります。

また、リムセ（おどり）やウポポ（歌）も数多くあります。毎日の生活の中で、あるいは儀式をおこなう時に、歌やおどりが演じられ、伝えられてきました。

また、物語であるサコロペやオйнаも、歌のように節をつけて歌われました。

そのほか、口を使って音色や音の高さを変える楽器（口琴）である「ムックル」などの演奏が伝えられています。

こうした口伝による文化は、地域ごとに独特な種類のもので誕生し、発展してきました。



帯広カムイウウポポ保存会の人たちなどによる「バツタキウポポ（バツタのおどり）」。（上士幌町・東泉園での『オッパイ山大祭』：3）

1 サコロペ、オйна：ほかの地方では、サコロペは「ユカラ」、オйнаは「カムイユカラ」と呼ばれる。

2 東泉園（とうせんえん）：上士幌町字上音更（p120・p129・p131）

3 オッパイ山（オッパイやま）：上士幌町と足寄町の境にある、ピリベツ岳と西クマネシリ岳の二つの山。三股（上士幌町）から2つのオッパイに見えることからこう呼ばれる。アイヌ民族の聖地とされ、祭りがおこなわれる。（p134）

## ムックル<sup>4</sup>をやってみよう... 独特のひびきに心をゆだねる<sup>どくとく</sup>

ムックル<sup>4</sup>は、アイヌ民族<sup>でんとうてき</sup>の伝統的な楽器の一つです。世界各地にある「口琴<sup>こうきん</sup>」の一つで、口もとで音を鳴らして口の中でひびきを大きくし<sup>きょうめい</sup>（共鳴させ）、口の形や息などによって曲をかなでるものです。

今よく目にするものは竹でできていますが、チシマザサやノリウツギ（アイヌ語でラスパニ）などで作られることもあったようです。

ムックルを手にしたら、まずは口に当てないで、音を出せるようになりましょう。コツは、少しななめ向こうに糸を引くことと、引っぱったらすぐ糸をゆるめることです。なれないうちは、けっこう力がいらいます。

「ビョーン・ビョーン・ビョーン…」と小さいながらも、音がひびくようになったら、動かさない方の手をほおに固定して、口を半開きにします。さっきつかんだコツのとおり糸を引くと、ひびきが大きくなるのがわかります。

あとは、口を大きくしたり小さくしたり、あるいは息をふきかけることで、音程や音色を変えることができます。あまりうまくできなくても、自分で鳴らすムックル<sup>ねいろ</sup>の音色は体と心の中にひびきます。



ムックルの演奏をする東泉園(上土幌町)の川上けさ子さん。右後ろはおびひろひやくねんきねんかん<sup>あひひろひやくねんきねんかん</sup> 帯広百年記念館(5)の内田学芸員。(『イオル体験ツアー』より)



(左)「イオル体験ツアー」で川上さんの指導を受け、ムックルを練習する(上土幌町・東泉園)。(右)ムックル(幕別町蝦夷文化考古館 p150)。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

## アイヌ文化の手工芸<sup>しゅこうげい</sup>... 自然と交易から産み出される服や道具<sup>こうえき</sup>

服や道具をつくる手工芸<sup>しゅこうげい</sup>の技術も、親から子へと伝えられながら、地域ごとに特ちょうある文化を発展させました。材料には、草や木など身近な自然のものと、交易<sup>こうえき</sup>で手に入る、本州や大陸のものがありました。

布<sup>ぬの</sup>は、本州からきた木綿の布を使うほかに、木の皮のせんいやイラクサなどの草のせんいから織られました。

オヒョウ(アソビウ)という木の内皮からとったせんいで作った服は「アットウシ」といいます( p141)。木の皮をむき、内側のやわらかい皮を水や温泉につけてふやかし、大変な手間をかけてせんいを取り出しました。

衣服には、ししゅうでもよう(文様)が入られ、アイヌ文化のシンボリックな存在となっています。

布やししゅうをぬうための針は、交易によって手に入るもので、大変貴重でした。女性は細工した「針入れ」に入れ、大切に身につけたといいます。幕末の探検家、松浦武二郎( p142)は、世話になるアイヌの人たちへのみやげとして針をわたして、大変喜ばれました。

また、「チタルベ」といわれる文様入りのゴザは、家の壁や祭だん(ヌサ: p134)をかざりました。チタルベは、沼などの水辺に生えるガマ(シキナ)という草に、オヒョウやシナノキ(クペルケツニ)といった木の内皮を染色したテープ状のものを織りこんで作られました。

こうした、ぬう・編む・織るといったことは、女性の仕事でした。

男性の手工芸は、彫刻や木工です。狩りのための道具や小刀、タバコ入れなどが、さまざまなデザインで作られ出されました。



服に入れられたししゅう(釧路地方)。(『山本多助エカシ展』より)



細工された小さな刀(マキリ)。(上土幌町・東泉園)

4 ムックル: 本格的な演奏は、帯広カムイトウボボ保存会など、各地で伝承活動をおこなっている人たちの演奏や、安東ウメ子さんのCD(幕別町教育委員会)などで聴くことができる。

5 帯広百年記念館(おびひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館  
6 幕末(ばくまつ): 江戸幕府(えとばくふ)末期の略で、江戸時代終わりのこと。